



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT4 1495

1961年9月29日、コヴェントガーデンの音楽監督に就任したばかりのゲオルグ・ショルティはロイヤル・オペラハウスにて新演出の《ヴァルキューレ》を演奏した。ショルティの契約は3年と限定されていたが、これは、コヴェントガーデンがこの重要なポストを誰かに独占させることなく運営する方針があったためで、ロンドンを一挙に世界のオペラ界の中心とするのに重要な施策であった。

第二次世界大戦中、ロイヤル・オペラハウスはメッカ・カフェが運営するダンス・ホールとして使われていた。1945年に本来の用途に使われるようになったのは、数人の献身的な人々の奮闘によるものだった。やらなければならないことが山積みだった。戦前の経営陣も運営本部も1939年から存在しておらず、全く新しい組織をゼロから立ち上げなくてはならなかった。真っ先に行われたのは、デイヴィッド・ウェブスターを統括的な理事に任命することだった。彼は、精力的で上昇志向の強いビジネスマンだったが、音楽や芸術に情熱を併せ持っていた。ウェブスターの最初の仕事は、ニネット・ド・ヴァロア率いるサドラーズ・ウェルズ・バレエ・カンパニー（現在のロイヤル・バレエ）をコヴェントガーデンに移したことである。当時、このバレエ団にはマーゴ・フォンテインというスターがいた。1945年6月、コヴェントガーデン・オペラ財団は、すでにヨーロッパ・オペラ界で確固たる実績を誇っていたカール・ランクルを音楽監督とする旨を正式に発表した。国家的なオペラ・カンパニーを創設することは財団の強い意志だった。そのためには、バレエ団も歌劇団も英国人で構成され、独自の伝統とスタイルを築き上げる必要があった。最終目標として、英語によるオペラ上演を目指していた。

ランクルはこれらの方針を完全に委ねられていた。しかしながら、客演指揮者を多く招くことに乗り気でなかったことで、1951年に辞任した。彼の辞任後、4シーズンが音楽監督なしに運営され

る。この空白期間を事実上埋めたのは、エーリッヒ・クライバーとルドルフ・ケンペの両指揮者であった。このふたりの指揮者により音楽的力量は格段に向上し、コヴェントガーデンは高い演奏水準と評価を獲得するに到った。ところが驚くべきことに、1955年、ラファエル・クーベリックが音楽監督に就任する。ランケル同様、クーベリックも英語によるオペラ上演に賛成しており、専属アーティストによる歌劇団の構築に熱心だった。しかし、実際ワーグナーを含むいくつかのオペラにおいて、英国人だけの配役や満足できる英語対訳を探すことが非常に難しくなってきた。1950年代には、一部オペラはオリジナル言語で上演されるようになり、マリア・カラスによる《ノルマ》やクライバーによる《エレクトラ》などが挙げられる。

クーベリックの在任期間はわずか3年で終わり、再び正式な音楽監督を置かない3年間を経験することとなる。デイヴィッド・ウェブスターはこの状況にとりわけ反対することはなかった。ケンペがこのポストを引き継いでくれることが望まれていたが、他の楽団との契約の関係上叶わず、単発契約でコヴェントガーデンに出演し続けることになる。

ゲオルグ・ショルティが初めてロイヤル・オペラハウスに出演したのは、1959年の12月のことだった。演目は《ばらの騎士》で1938年以降初のドイツ語上演だった。戦争中スイスで過ごしたハンガリー人であるショルティは、戦後、1952年までミュンヘンで活動した。その後、フランクフルトに移り、ロンドンへ移住するまでこの地で過ごした。コヴェントガーデン財団の理事長に復帰していたデイヴィッド・ウェブスターは《ばらの騎士》での成功によりショルティを音楽監督に迎え入れる。管弦楽作品の演奏に集中することを考えていたショルティは一旦辞退するが、ブルーノ・ワルターに説得され最終的にはウェブスターの申し出を受け入れた。

この音楽監督というポストに正式に就く前の1961年2月、ショルティはコヴェントガーデンに再び登場する。演目は初演が大成功を収めたばかりのブリテンの新作オペラ《夏の夜の夢》だった。音楽監督としての公式デビューは1961年8月、この歌劇団が初めてエディンバラ音楽祭に出演した際であった。演目はグルックの《タウリスのイフィゲニア》だったが、タイトル・ロールを歌ったリタ・ゴールが精彩を欠き、演奏全体として大成功とはいえないものだった。ロンドンに戻り《タウリスのイフィゲニア》を2度再演し、ついに新演出の《ヴァルキューレ》のリハーサルが開始された。これは新演出の《指環》全曲プロジェクトの最初の演目という位置づけであった。

ワーグナーは常に、コヴェントガーデンにおけるドイツ・レパートリーの中核であった。戦前より、著名なワーグナー歌手がこぞって出演していた。《ヴァルキューレ》がコヴェントガーデンで初演されたのは1892年のことで、グスタフ・マーラーによる《指環》全曲初演より22年も後のこと

だった。それでも、《指環》の中で《ヴァルキューレ》は最も人気が高かった。戦後新体制になった40年代後半から50年代にかけて、ワーグナーは最重要レパートリーで有り続けたのである。《トリスタンとイゾルデ》が数え切れないほど上演されたのに加え、《マイスタージンガー》や《パルジファル》といった主要作品も当時の最高峰のワーグナー歌手によって上演された。1948年、キルステン・フラグスタートとハンス・ホッターは、当時の歌劇場の方針による英語上演に悩まされながらも英語版《ヴァルキリー》を演じた。1954年の新演出《指環》全曲も高い評価を得、音楽的水準はバイロイトすら一目置くほどであった。初演はフリッツ・シュティードリーにより行われたが、リバイバル上演を大成功に導いたのはルドルフ・ケンペその人であった。彼の精緻で力強い指揮法がこの壮大な音楽に詩情と力を与えた。また、常に歌手陣を完璧にサポートした。1959年の《指環》はフランツ・コンヴィチュニーによって指揮された。これが彼の唯一のコヴェントガーデン出演である。アストリッド・ヴァルナイ、ヴォルフガング・ヴィントガッセン、それにハンス・ホッターといった超一流の歌手との共演により、コンヴィチュニーはかなり発展的な解釈を披露した。この演奏法は楽団員によって受け継がれ、今日でも最高の解釈のひとつとして記憶されている。

ケンペ最後の《指環》全曲演奏は1960年9月のことで、新演出公開の一環として行われた。《ヴァルキューレ》と同時に違うオペラの上演も開始された。これらは、新しく音楽監督に就任したショルティの発奮を物語っている。ショルティの提案により、《ヴァルキューレ》でヴォータンを歌うハンス・ホッターをプロデューサーに、ヘルベルト・ケルンをデザイナーに任命した。しかしながら、ケルンのデザインは大変不評で、《ヴァルキューレ》の後に解任された。次のデザイナーはギュンター・シュナイダー＝ジームセンに決まった。ホッターは、オペラ雑誌の中で、プロデューサーとして直面した軋轢について書いている。シンボルと抽象概念を多用する新しいバイロイトのコンセプトに従うべきか、自然主義に徹し元来のワーグナーらしい舞台演出を続けるのか？ショルティは後者を好んだ。結局ホッターは、2つの概念の統合によってこの軋轢を解消しようとした。結果、舞台には「見られるもの」というよりは「感じられるもの」という効果がもたらされた。

公演が重ねられるにつれて、ほとんどの役はコヴェントガーデンに属する歌手が歌うようになっていった。エイミー・シュアード（ブリュンヒルデ）、デイヴィッド・ワード（ヴォータン）、ジョセフィーヌ・ヴィーギー（ヴァルトラウテとフリッカ）などである。しかし《ヴァルキューレ》の公演の際には、ジークムントのジョン・ヴィッカーズとフンディングのマイケル・ラングドンを除いて、主要な役は外部の歌手が務めた。同時に英語版《ヴァルキリー》はコヴェントガーデンの若手歌手たちの大活躍で公演が続けられた。中でも、マリー・コリアー、マルガレータ・エルキンスそしてジョセフィーヌ・ヴィーギーは実力どおり世界的な歌手として認められていった。しかしながら、シ

ョルティが就任した頃から、自前の歌手で英語上演をするという古いポリシーからは徐々に脱却が始まっていた。1958年5月の《ドン・カルロ》の大成功が大いに影響し、首脳陣は国際的スター歌手を起用しオリジナル言語での上演に舵を切ったのである。

評論界でのショルティの指揮に対する評価を高まっていった。フランシス・ドナルドソンは自身の著書「20世紀のロイヤル・オペラハウス」(George Wiedenfeld and Nicolson, 1988)で、当時の評判を「ショルティ氏はスコアに壮大な解釈を加えた。」と紹介している。タイムズ紙の評論家は《ヴァルキューレ》観劇後「オーケストラとして戦後最高」と掲載した。フィリップ・ホープ＝ウォレスは「実に見事な演奏・・・ショルティの音楽監督としての初の作品であり、熱狂的なファン達の未だ失われていない愛の結晶でもあった。」と評した。エドモンド・トレイシーは「身体中に興奮が伝わるような演奏」と述べた。

ショルティは残りのオペラでも同様の喝采を浴び続けた。しかしながら、1964年に《指環》チクルスが完成した頃には、頻繁に劇場に通うファンが集まる上段の客席に反ショルティの小さな徒党が形成されもした。アンチ＝ショルティ派は、ショルティの持つ緊張感、音量、オケの酷使といった特色は、常にオペラに要求される詩情や温かみと相容れないと感じており、ショルティひとりのカーテンコールの際、しばしばブーイングを行うことで意思表示をしようとした。ただし、こうした兆候は1961年時点ではまだ見られず、《ヴァルキューレ》の初演は世界的賛辞を得たのである。

キャストは並外れて豪華である。ブリュンヒルデは、フィンランド出身の若手ソプラノ、アニタ・ヴェルキが務めている。彼女の温かみのある声と胸に訴えかけるステージ・パフォーマンスがこのエポニムなヒロインを最上級のものとしている。ハロルド・ローゼンタールは1961年11月号のオペラ・マガジンで9月29日に行われた初日の舞台について書いている。「ヴェルキのパフォーマンスは未熟な女戦士というよりはむしろ、激しいまでの若さを印象づけるものだった。だがこの印象は、ヴォータンへの嘆願の中で大きくプラスに働いた。《戦いの叫び》が要求する高い技術もやすやすとこなしていた。」だが、ローゼンタールが最大の賛辞を送ったのは、フリッカを演じたリタ・ゴールであった。「声樂的にも演劇的にも、これこそヴィルトゥオーゾの歌唱である。ゴール女史が舞台を支配していたといってもよい。ヴォータンだけでなく観客までもが、彼女の痛烈な言葉と高慢な立ち居振る舞いに恐れおののいた。オーケストラもこの歌唱を完璧にサポートした。真に偉大なアーティストである。」さらに、クレア・ワトソンが歌ったジークリンデに関する記述がある。「優しく女性的。第三幕でのジークリンデのシーンは圧巻だった。」ジョン・ヴィッカーズに関しては、「彼のベストの出来とは言い難かった。ところどころ、ジークムントが非常に軽く感じられた。」と否定的であるが、この録音を聴く限り印象は全く異なる。この録音からは、しっかり役になりきった心躍ら

せる歌唱が聴いて取れる。ローゼンタールはさらに、1934年からヴォータンを歌い続けてきたホッターにも触れている。「ステージ上での存在感は圧倒的である。ホッターはヴォータンを’現人神’に作り替えてしまったかのようなだった。怒りの場面では、ぞっとするほどの表情を見せたが、ブリュンヒルデに対する慈しみの感情はこの上なく優しいものとして表現された。」

他のすべての評論家同様、ローゼンタールも惜しみない賛辞をショルティに送っている。その中で、ショルティの選択したスタイルは当時のコヴェントガーデンで聴かれたものとはかなり異質なものであったことも指摘している。「ショルティが正しくケンペが間違っているというわけではない。逆もまた然り。ワーグナー音楽へのアプローチ方法はひとつではないのだから。だからこそ、ワーグナーの音楽は人々を魅了し続け永遠に生き続けるのだ。その夜のオーケストラの出来は素晴らしく、コヴェントガーデンが一流歌劇場オーケストラを持ったことを実感させた。今まで聴くことのなかったワグネリアンのどよめきが沸き立ち、オーケストラの響きは言葉で言い尽くせぬほど刺激的だった。」これにショルティへの賛辞が続く。ショルティの音楽家魂、響きとバランスに対する耳の良さ、この音楽を牽引する力と情熱を賞賛している。

この演奏がなされた頃には、金字塔と呼ばれるデッカへの《指環》全曲録音がすでに始まっていた。《ラインの黄金》がウィーンで録音されたのは1958年である。《ジークフリート》が1962年、《神々のたそがれ》が1964年、そして1965年に《ヴァルキューレ》の録音を持ってこのチクルスは完成することになる。このライブ録音は、1961年の9月と10月にコヴェントガーデンで行われたショルティの《ヴァルキューレ》4回の公演のうち第二回目を収めたものである。英国ロイヤル・オペラと10年にわたり音楽監督として君臨したショルティの一場面を捉えた、特別な歴史的価値をもった録音である。

© Tony Locantro, 2014

訳：堺 則恒

参考文献:

The Quiet Showman Sir David Webster and the Royal Opera House

Montague Haltrecht (Collins, 1975)

Opera at Covent Garden A Short History

Harold Rosenthal (Gollancz, 1967)

The Royal Opera House in the 20th Century

Frances Donaldson (George Wiedenfield and Nicolson, 1988)

Two Centuries of Opera at Covent Garden

Harold Rosenthal (Putnam, 1958)

アニタ・ヴェルキ (1926-2011)

フィンランドのソプラノ歌手、アニタ・ヴェルキは 1955 年フィンランド国立歌劇場で歌手としてのキャリアをスタートした。世界的なデビューは 1960 年ストックホルムでのトスカのタイトル・ロール。翌年、アイダ役とヴァルキューレでのブリュンヒルデ役でコヴェントガーデンに出演。1962 年には同役でニューヨーク・メトロポリタン歌劇場に出演し成功を収めた。その後、プラハ、ベルリン、ウィーン、バイロイトなど主要な歌劇場でワーグナーの重要な役を歌う。同時に、トゥーランドットのスペシャリストとしても認識されていった。1970 年代には、母国であるフィンランドに移住することを決意し、1986 年に引退するまでこの地で活動することとなる。引退後は、ヘルシンキのシベリウス・アカデミーで後進の指導にあたった。

ハンス・ホッター (1909-2003)

20 世紀を代表するバス・バリトン歌手。ドイツのオッフエンバッハ・アム・マインに生まれる。オペラ歌手としてのデビューは 1930 年トロッパウ（オパヴァ）でのことで、《魔笛》の弁者を演じた。プラハで数年(1932-34)を過ごした後、第二次大戦が終わるまで主にドイツとオーストリアで活躍し世界的に認められるようになる。40 年以上に及ぶキャリアを誇りさまざまな役を演じているが、ワーグナー歌手として知られ、アンフォルタス、グルネマンツ、クルヴェナール、ザックス、さまよえるオランダ人などを歌っている。とりわけ、1952 年から 1958 年の 7 年間にわたり、毎年バイロイトで《指環》におけるヴォータンを演じたことで知られている。

クレア・ワトソン (1927-1986)

ニューヨーク市生まれ。エリザベス・シューマンに師事し、その後ヨーロッパで研鑽を積む。1951 年グラーツにて、《オテロ》のデズデーモナを歌いオペラ歌手としてのデビューを果たした。1955 年にはフランクフルト、1958 年からはミュンヘンの歌劇場の一員として活躍した。温かみのあるパワフルな声のリリック・ソプラノとして、モーツァルト歌劇の役に適材とされ、《フィガロの結

婚》のアルマヴィーヴァ伯爵夫人や《魔笛》のパミーナ、その他にもアリアドネや《カプリッチョ》の伯爵夫人、《ばらの騎士》の元帥夫人などリヒャルト・シュトラウスのヒロインも多く演じた。元帥夫人は、彼女の 1958 年コヴェントガーデン・デビューの際の役でもある。ワーグナー歌手としても、《マイスタージンガー》のエファや《ヴァルキューレ》のジークリンデで高い評価を受けている。有名な DECCA のブリテンのオペラ《ピーター・グライムズ》（指揮もブリテン）ではオーフォードを演じている。

ジョン・ヴィッカーズ (1926-)

カナダ出身のテノール歌手。1954 年からカナダ・オペラ・カンパニーでプロとしての活動を開始する。そこでのキャリアに満足していなかったヴィッカーズは、コヴェントガーデンからのオファーを受け 1956 年に契約を締結。翌 57 年に《仮面舞踏会》で華々しいデビューを果たす。パワフルな声と卓越した演技力により世界中で多くの役に抜擢され、好評を博した。《フィデリオ》のフロレスタン、《アイダ》のラダメス、《カルメン》のドン・ホセ、ドン・カルロ、《メデア》のジャゾーネ、トリスタン、ジークムント、オテロ、ピーター・グライムズなどである。1957 年コヴェントガーデンでの《トロイアの人々》で、アエネアスを演じ大成功を収めたことは特筆すべきキャリアであろう。（同録音は SBT4 1443 として発売中）1961 年、《ヴァルキューレ》のリハーサル中にショルティと大げんかをし、以降ショルティの指揮では歌わないことを宣言する。ジーニー・ウィリアムズによる彼の伝記「ジョン・ヴィッカーズ：ある英雄の生涯」(Northeastern University Press, 1999)には、この諍いの原因が書かれている。恐らく、ヴィッカーズはショルティの指揮に従うと喉を痛めると感じ、ショルティにはヴィッカーズが非協力的で音楽制作の妨げになると映ったのであろう。この発端は、「冬の嵐を追い払い」の冒頭でのことだった。ここで、二人は妥協を止めた。お互いが目指すところの演奏を調和させることは出来ないと考えたのであろう。デイヴィッド・ウェブスターはふたりの仲を取り持とうと試み、ショルティはヴィッカーズに手紙を書いている。その手紙では、指揮者と歌手がどのようにお互いの音楽的見識をすり合わせ協力して行くかについての自身の考えが綴られていた。さらに、ウェブスターは 1962 年に予定されていたオテロにヴィッカーズを出演させ和解させることも試みたがうまくいかなかった。ショルティは 1964 年にヴィッカーズを説得し《指環》全曲の一環としての《ヴァルキューレ》再演で、ジークムントとして出演を依頼した。しかしながら、ヴィッカーズは頑なにショルティとの関係回復を拒否し続け、二度と共演は叶わなかった。1988 年に引退。

リタ・ゴール (1926-2012)

リタ・ゴールは、ベルギー出身のメゾ・ソプラノで、《ローエングリン》のオルトルートや《アイーダ》のアムネリスといったドラマティックな役柄を得意とした。1946年アントワープで《ヴァルキューレ》のフリッカを歌いデビュー。パリで、カルメン、デリラ、《ドン・カルロ》のエボリ公女などの多岐に及ぶ役を経験した後、1949年から1952年まで、ストラスブール歌劇場の一員として活躍した。1958年より、バイロイト、ロンドン、ミラノ、ニューヨークでの国際的な活動で注目を浴びるようになる。60代70代になっても衰えを見せず、非常に長いキャリアを誇る。最後の出演は、チャイコフスキーの《スペードの女王》の伯爵夫人で、2007年にヘントとアントワープで上演された。

マイケル・ラングドン (1920-1991)

英国ウルヴァーハンプトン出身の真のバス・プロフォンド。1951年よりコヴェントガーデンにて首席バス歌手を務め、1960～70年代には世界中の主要歌劇場に出演した。特に《ばらの騎士》でのオックス男爵での出演回数は際立っている。もちろん、本拠地コヴェントガーデンでの出演回数も非常に多く、イギリスの現代作曲家によるオペラに精力的に出演している。《真夏の結婚》（ティペット）、《グロリアーナ》《ビリー・バッド》《夏の夜の夢》（ブリテン）、《オリンピアンズ》（ブリス）などである。1977年、引退。

サー・ゲオルグ・ショルティ (1912-1997)

ブダペストに生まれる。この地でバルトーク、ヴェイネル、ドホナーニの元で研鑽を積む。1930年代には、ハンガリー国立歌劇場にてコレペティートルや、ザルツブルク音楽祭でアルトゥーロ・トスカニーニのアシスタントなどを務めた。ユダヤ人であったため、第二次大戦中はスイスに避難し、指揮を禁止されていたためピアニストとして活動した。戦後、1946年からミュンヘン、1952年からはフランクフルトの歌劇場でそれぞれ音楽監督を務める。1961年よりコヴェントガーデンの音楽監督に就任。1971年までこのポストにあり、コヴェントガーデンを世界的水準の歌劇場に引き上げることに大いに貢献した。コヴェントガーデンは一流の歌劇場と認められ、1968年には「王立歌劇場」を名乗ることが許される。1969年、シカゴ交響楽団の音楽監督に就任し、1991年の引退までこの地位を維持した。1953年に西ドイツの市民権を得、その後1972年にイギリスの市民権を得た。